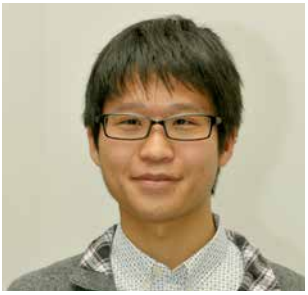
TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本
あなたは、まだ何にだってなれる。

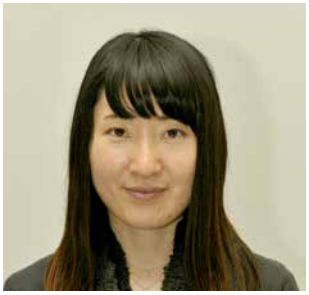
早稲田大学 文化構想学部

文化構想学部は多元文化論系、複合文化論系、表象・メディア論系、文芸・ジャーナリズム論系、現代人間論系、社会構築論系の6つの論系から成り立っています。論系という呼称には、創造的に論じながら新たな学問を切り開いていくというメッセージがこめられています。



■大学生
二宮朋輝 さん

■先生
小沼純一 先生



■卒業生
滝口美紗紀 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

早稲田大学 文化構想学部の学びの特長を教えてください。

■先生
もともとの第一文学部、第二文学部を組織改正で組み替えた学部のひとつなので、教員は同じですが、英文科や社会学といった旧来の類型から比べて横断的な学びができるようになりました。
かつては、ラテンアメリカの音楽やイタリア文学などは文学部にはないので、そうした学びを深めたい学生のための居場所を用意できていませんでした。
しかし、文化構想学部の例えば文芸・ジャーナリズム論系に来てもらえれば、自分の好きなジャンルを学ぶことができます。昔であれば扱えなかった漫画やアニメーションを題材にできる表象・メディア論系もありますし、現代人間論系というところでは科学的なものや心理学的な物事を扱っています。
そうした数々の題材や学問の中で、文学はどういった位置づけなのかというテーマも出てきます。以前よりはもう少し広く自分の興味を当てはめることができて、学びの選択肢は広がっていると思います。

私たちはかならずしも専門ではないながらも、“より広い意味での文学”と捉えて指導することができます。受け皿がかなり広い学部であることが特長です。

学生のために用意されている制度はありますか？

■卒業生

大学と提携している美術館に無料で入場できる「国立美術館キャンパスメンバーズ」の制度があります。よく、美術館の入口に「対象の○×学部は入場無料です」と掲示されていますよね。ただし、使える論系は限られてしまいますが……。一度、他の論系の友人と一緒に美術館に行った際に、私だけ入場料を払ったことがあるのでよく覚えています（笑）。それから、文化構想学部は２年次から論系へ進学できるのが、良い制度です。入学したての１年次は、授業を取りながら進路を考える余裕があります。

■先生

文学部に入る方は、例えば日本史が大好きで専門性を深められることが望まれています。
これに比較してもう少し選択の幅が広いのが文化構想学部です。
本学では、１年次の基礎教育を経て、２年次からは文化構想学部が６論系、文学部が 17 コースに分かれていく「1・3 制カリキュラム」を導入しています。１年次では専門分野に進んだ際に困らないように、資料検索のノウハウや論理的思考能力などを養う基礎演習・基礎講義と共に、必修英語に加えて英語以外の外国語を１つ選択します。
さらに、カリキュラムでは両学部の教員の交流が盛んに行われており、外国語科目と講義科目を共通化した「ブリッジ科目」が特長です。これは、人文系、文化系の諸分野を古典から新領域まで、両学部を合わせておよそ 1,000 科目を自分の興味や目的から履修できるシステムで、様々なテーマを立体的に探究することができます。

●大学生活について

現在はどのような勉強をされていますか？

■大学生

私は文芸・ジャーナリズム論系で小沼先生のゼミに所属していますが、研究内容は一言で言うとすれば批評です。しかし、例えば法学部であれば「商法」「行政法」などという区分がありますが、文芸・ジャーナリズム論系にはそういったものがなく、批評という言葉が適切なのかと問われると難しい部分がありますね。
間違いなく言えるのは、先生がよくおっしゃっている「ことば」を主に扱っている、ということです。

■先生

何かを考える上で私たちは言語を使っています。それは実験であっても、数式であってもすべては言語から始まっていますし、それがなければ何もできません。では言語とはいったい何なのかを考えつつ、それを使って何かを表現するというのはどういうことなのだろうかということです。そこをしっかり把握していれば、いろいろな事象に対して自在にアプローチできるだろうということを学んでいるゼミです。

■卒業生
私は在学中、小沼先生のゼミに所属していました。このゼミでは、音楽・文学・映画をはじめとした様々な作品にふれて批評を書き、また書いたものをお互いに批評します。「批評」は、感想文や単なる個人の意見とは違います。歴史的背景や評価を交えながら、作品を学術的に論じ、新たな価値を見出していく文章のことです。

この大学や学部に入ろうと思ったきっかけを教えてください。

■大学生
高校生までは理系科目の方が好きでしたが、高校の現代文の先生に面白い授業をする先生がいて認識が変わりました。問題の解き方だけを扱うのではなく、文化構想学部のように言葉１つ１つについてなど、本当に細かい部分まで探っていくような先生でした。それがきっかけで、文学、そして言葉は面白いと感じて、文学部志望に変わりました。
通っていた高校はどちらかと言えば進学に熱心で、偏差値を重視するような傾向がありました。学部を選ぶ際には偏差値や将来性などから経済学部や法学部を選ぶ同級生が多かったのですが、私は文学部への拘りを捨てきれず、色々な大学の文学系の学部を受けていました。
初めから早稲田の文構という考えがあったわけではなく、まずは文学部に主眼を置いていました。この学部を受験しようと思ったのは、高校の先生に「文化構想学部が最近面白そうだよ」と教えていただいたことがきっかけです。加えて、先輩から「早稲田は魅力的な学生が多い」という話も聞いていたため、この大学のこの学部であれば、授業だけでなく何か面白いことがあるのではと思い入学しました。
■卒業生
二宮さんと違って、私は「早稲田に行きたい」と明確に思っていました。好きな作家の出身校でしたし、他にも著名な文化人を多く輩出している大学でしたから。私は高校生の頃から日本文学が好きで、数々の文学作品を読んでいました。大学でも文学の勉強がしたいと思い、進路は文学部と決めていました。両親や先生も「良い選択だと思うよ」と背中を押してくれたので、嬉しかったです。

魅力的な学生が多いというお話しですが？

■先生
何をもって判断するかは難しいですが、学生数が多ければ多いほど魅力的な人間は増えるのではないでしょうか。
文化構想学部にはある種のこだわりを持っている学生がいますし、一方で何をやりたいかがまだ分からない状態で入学する方もいます。ポリシーはあるがあまりモチベーションを発揮するところが分かっていないような（笑）。
滝口さんと二宮さんは、以前からあまり印象が変わりません。しかし、私自身は成績というよりは取り組みの姿勢を問題にしています。好奇心がない学生にはこちらも興味が持てないので、そういう方は私のゼミには向いていないと思います。そういう意味では２人は成績的に優秀な上に、とても前向きな姿勢がある学生ですね。
■卒業生
成績には自信がなくても、好奇心には自信があります（笑）。
■先生
大学で授業にばかり出ていてもしようがないよ、ということです。それよりは展覧会や映画や食べ

物でもよいですが、外にどんどん出てください。自宅と大学とバイト先との３点で動いているだけでは、世界が広がらないよとよく焚き付けています。

印象的な先輩や同級生もいらっしゃるようですね。

■卒業生

私たちの代のゼミ長は、普段はとてもおっとりしていましたが、反面、文章を書くととても上手で、その上博識でした。その同級生のギャップが私にとっては衝撃でしたし、負けられないなと感じていました。

■先生

印象的な学生でしたね。

■大学生

小沼ゼミの欠席連絡は SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）で行っていますが、そのコメントがすべて詩になっている学生がいます。欠席の報告だけに落ち着かず、その周りにどういうことがあって、どういう流れでこうなっているか。心の動きが分かる文章です。私は毎回楽しみにしています。

■先生

欠席連絡をどのようにするのかは、私の判断にも多少の影響を与えます。時間の直前に単に「お腹が痛いから」と言われては、困るなとなってしまいますが、彼の場合は少しレトリックが違いますね。語り口ひとつで見え方は変わってくるわけです。ことばをどう応用するのかというのは大切ですね。ユーモア、センスも、多くを読むことでこそ養われるものです。

印象に残っている授業を教えてください。

■卒業生

小沼先生の「音楽文化論」という講義です。古今東西の重要な音楽作品にふれ、考えの幅が広がるような内容でした。文化構想学部の講義ではこのように、音楽を聴く・映画を観るなどの機会が多く設けられています。実際に作品と向き合って批評やレポートを書くので、文章を書く力がつきました。学んでいるうちに、自然と好みの分野や、研究対象を見つけやすかったです。この講義では、自分ひとりでは決して出会えなかった作品にふれられたのが良かったですね。私はバレエにまったく興味がなかったのですが、音楽文化論で鑑賞したイーゴリ・ストラヴィンスキーの『火の鳥』には衝撃を受けました。これまでバレエといえば『白鳥の湖』のようなイメージを持っていたのですが、この作品の斬新な音楽や衣装を見て、考えが一変しました。このように、講義を通じて、博識な教授に文化の一端を見せていただけるのは、ありがたいですね。

■大学生

私が大学に入って初めて受けた講義が「音楽文化論」でした。ただ単に音楽が面白そうだと思って受講しましたが、環境音楽を扱う授業があり、「音と音楽の違い」といったことについて考えさせられました。他にも小沼先生が担当されている授業で、大学の近くにある公園に行って、聞こえる音をすべて書き取ってくるようなフィールドワークがありました。

街で聞こえる音には、その方向や大きさなどの様々な要因が絡んでいます。その上、音は時間や場所や気温が変われば変化してしまうもので、そういった音の一回性という部分が印象的でした。

講義は全部で 15 回ですが、音楽１つを取ってもここまで深く探る学部なので、文学や美術など様々な作品を扱う中で必ずピンポイントに刺さる回があると思います。自分自身でも興味のポイントを

発見していくのが面白いですね。文芸・ジャーナリズム論系は作家や詩人、書店を経営されている店長の方などが授業をすることもあります。私は出版サークルに所属しており、書店の棚の組み方や本の流通の仕方などが聞けてとても参考になりました。

先生の講義ではどのような工夫をされていますか？

■先生

例えば、自分のゼミ生たちが「今度こういう展覧会があるよ」「こういう映画が上映されるよ」と互いに情報交換できるように SNS を利用しています。告知だけではなく、実際に参加してきた学生が自分が見てきたことを投稿することもできます。これは在学のゼミ生だけではなく卒業生も参加していて、最近では滝口さんが最近読んだ本のことを、「卒業した人間から見るとこういう本だよ」という感じで投稿してくれています。皆でシェアできるので興味喚起には良い試みだと思っています。

■卒業生

在学生の取り組みや、今みんなが読んでいる本をシェアできるのが嬉しい。私たち卒業生は、ゼミを卒業した後も一緒に勉強している感覚になりますね。

大学生活で注力されていたことはありますか？

■大学生

サークル活動はかなり充実していますね。早稲田には本当にたくさんのサークルがあって、中には学生とは思えない規模で活動しているところも多くあります。先程も触れましたが、私は出版サークルに所属していて、春に発行する早大生向けの総合情報誌やフリーペーパーを制作しています。授業で学んだことと繋がること、矛盾することの双方があり、良い刺激となっています。

また、私はサークル内で Web 担当を務めており、その勉強のために外部のプログラミングスクールに通っていました。早稲田には多くのサークルがある分、新入生の争奪戦は熾烈を極めます (笑)。入学したら身を持って実感されると思いますが、その中で自分に合ったサークルを見つけるのは至難の業です。そこで所属しているサークルでは、学内のサークルが行う新歓期のイベント情報を収集して本にしています。それをスマホから見られるようにしようと、Web アプリを制作しました。もはや学部とは全く関係ないのですが、学内だけでなく、外部にも目を向けて活動していくと、見える景色が変わってくると思います。

●就職活動、仕事について

就職活動のことについて教えてください。

■卒業生

就職活動の時は、周りの学生が動き始めたのを見て、焦って大手の就活サイトに登録しました。しかし、そこでは自分が探しているような仕事をうまく見つけられませんでした。私は埼玉県内で就職したかったのですが、サイトにあるのは都内の企業ばかりでしたから……。結局、大手の就活サイトの利用はやめてしまいました。その後は、中小企業専門のサイトや、埼玉県のヤングハローワークで仕事を探しました。

■大学生

最近はインターンシップや就職フェアなどのイベントに参加することが多いです。一般的に理系学部の方が社会に出てから役立つと言われていますが、それが逆だと思うことがあります。理系は学んでいることの専門性が高く、仕事内容と直結しないことが多いと社員の方から言われました。いわゆる学者と呼ばれる方は各々のフィールドで研究しているのでこの限りではないと思います。しかし、文学部系の友人と話をしていると、社員の方とここで話が合ったとか、会話が盛り上がった

というようなことを聞きます。適応能力がとても高いのだなと感じさせられますね。実学に遠いように思えて、意外と近いのかもしれません。

● 5 年後に向けて

将来の夢はありますか？

■大学生

就職に限って言えばプログラミングスクールに通っていたこともあり、IT の技術的な仕事をしたいと思っています。周囲の理系の人とプログラミングについて話していると、改めて文理で物の見方は違っているなと感じることがあります。悪い意味ではなく「そういうところを気にするんだ」と。 プログラミング「言語」というだけに、プログラミングも結局のところ言葉を扱う作業です。プログラミング言語はもともとあったものではなく、人間が作ったものですよね。最近ではそれらがどういった経緯で、どういう思想を持って生まれてきたのかを知るのが楽しいです。 これから、理系の専売特許であった IT の世界が一般にも普及していきます。誰もが IT を駆使して、自由に好きなことができる時代が来ると思っています。そうしたときに、文化構想学部で学んだ「言葉」への感性は、人に技術を伝えるという場合でも、またユーザーとして何かを発信するという場合でも、これまで以上に重要になってくるのではないかと考えています。

■先生

文芸・ジャーナリズム論系に所属している教員の方々は作家であり、翻訳者であり、評論家です。本学の授業に加えて自分の仕事もしているので、内というよりは外で忙しい方がほとんどです。大学内の学生に向けた指導はもちろん行いますが、一般の人たちに向けて発信する部分が社会との接点だと思っていますし、こうした経験がまた授業にもフィードバックされています。

将来というなら、平穏な老後を送りたいですね（笑）。さまざまな差別などなくなって、そうしたことに悩まなくなるような、という意味ですが。

先生の研究の社会的な意義はどのような点にあるでしょうか？

■先生

ごく単純なことで、もう少し自分たちが人の話を聞くとか、声の調子を聞くとか、音の様々な様子を聞くとか、こういったことをおろそかにしなければ世の中はもっと良くなると思います。

■卒業生

そういった面は会社の中でもあると思います。

■先生

しっかり聞くことができれば、例えば“この政治家の演説は信用できない”と分かります。

今、私たちの周りにある音はほとんどが電子音です。スピーカーを通して聞くわけですが、その時の空気振動で音がどうなっているのか、あるいは自分が聞いている音が実は耳だけでキャッチしているものではなく、皮膚感覚や五感など周囲の気配を含めたものである、といったことにもう少し繊細であってくれれば世の中がより良く見えてくる。

決して新しいメディアが良くないというわけではありませんが、電車でゲームをしているよりは、乗車中の車内の騒音や、人の話し声がだんだんと変化していく様を追えるような余裕や関心があれ

ばよいと考えています。

■卒業生

豊かに暮らせるようになるということですね。

■先生

人は無駄な時間が苦手です。しかし、その無駄に耐えられる肉体的、精神的な強さが大事ではないでしょうか。エレベーターが昇っている間にボタンを連打してしまうのは構いませんが、例えば「五階です」という機械的な音声を「“五階”なのか“誤解”なのか」と思うか、「いや、聞き間違いだ」と思うか、「この発音ではどちらに聞こえるだろうか」などと思ったりしますが、そういった瞬間を大事にできる感性が必要だということです。文章の中にある文字は実は音の一種ですが、こうしたユーモアを持つことができれば文字に込められた表情も読み取れるようになるでしょう。これは自分の生き方に対しての倫理観とも言えます。

●高校生へのアドバイス

もし高校生に戻れるとしたら、やっておきたかったことはありますか？

■卒業生

有名な文学作品をもう少し読んでおけばよかったと思います。文化構想学部では、いわゆる“文豪”と呼ばれる人たちの作品はすでに読んでいるのを前提として、講義が進みます。私も高校生の頃はそれなりに読み込んでいるつもりでしたが、入学してからは「まったくレベルが違う」と感じました。知識の量によって、視野が変わってきますから。

■大学生

文化構想学部はどういう文脈で生きてきたかを求められる場所でした。そういう意味では、受験勉強だけでなく、もっと自分の面白いと思うことについて追求しておけばよかったと思います。

役に立った高校の授業はありますか？

■卒業生

現代文の授業が役に立っています。現代文は、他者の意見を理解する上でとても役に立つ科目です。しかし、私個人としては、どちらかというと“文学を好きになったこと”の方が役に立ったと思っています。大学を卒業してから３年間、毎日会社で働き続けられたのは、本を読む楽しみがあったから。自分の中に“好きなもの”を持っているというのは、それくらいパワーのあることなのです。勉強が大切なのは、内容が直接役に立つから、ではありません。今日学んだことが、いつか生きる力となり、あなたを助けてくれるかもしれないからです。

■大学生

現代文の先生が、書くことを強く求める人でした。私たちが黒板に書いた問題文の答えに対して、「なぜここはひらがなにしたのか」「なぜここの接続詞はこれにしたのか」「字が傾いているのは気持ちの変化があったのか」などと言われて、これが文学、文字に興味を持った原体験です。あとは、英語と数学はローマ字と数字を見る抵抗をなくすためにやっておいた方がいいと思います。プログラミングのエラー文はすべてローマ字と数字で表示されます。見るだけでうんざりしてしまいがちですが、目を慣らしておけばなんとか修正することができます。そう考えると、勉強は数なのかなとも思います。

■先生
そうですね。“量が質に転化する”時点があると思いますし、それは何に関しても言えるでしょう。

進路選択のアドバイスをいただけますか。

■大学生
偏差値で大学や学部を選ぶ人は多いですよね。入ってから後悔したという声も聞くので、文学部なら本を読む、経済学部であれば新聞を読むなど、少しでもその学問について触れてみてから学部を決めるのがいいのではないかと思います。模試で偏差値を見る前にやっておいた方がいいですね。受験に関しては、予備校に行くことだけが勉強法ではないと言いたいです。私の高校では授業の後に補講があって、そこに参加していれば無理をして予備校に通う必要はありませんでした。

■卒業生

私も予備校に通っていなかったので、同じように感じます。高校の先生が「学校の勉強だけで合格できるよ」と言ってくれたのを信じて、予備校に通いませんでした。受験は基礎が大事。まずは学校で教えられたことをしっかり身につけるようにしていました。そして、こちらもまた二宮さんと同じ意見になりますが、私も当時は現代文の先生が好きでした。高校生の頃は、好きな作家や作品との出会い、あるいは信頼できる先生との出会いなど、一生をかけるほどの情熱につながるチャンスがたくさん転がっています。運良く熱中できるものを見つけたら、それを目指して突っ走るのもアリだと思いますよ。

■先生
私ができるアドバイスは、「何かに興味を持つ」ことの必要性です。これは学生にも言っていることですが、自分の周りだけではなく、もっと外を見た方がよい。
高校生や大学生の時にやっていることが、その先にどう役立つのかは分かりません。私自身も、高校時代は自分の興味ははっきりしていましたが、それがどのように学問に結びつくのかは分かりませんでしたし、この年齢になってやっと分かることもあります。長い人生においてふとこういうことだったのかと気づくことがあるかもしれません。やった勉強を生かす、生かせるのはあなたがた次第ですね。
今になって後悔していますが、やはり数学はできた方がいいと常に思いますし、世界史や日本史を詳しいところまで知っておいた方がよかったなと思います。
また、外国語は英語だけ操れていても意味がありません。そのほかの言語のことを知っていなければ日本語のことも分かりません。それは、日本語の思考法が日本語でしか為されていないからです。英語で考えれば英語の思考法が分かります。すると２つのデバイスがあって、違いが明確に分かります。こうした比較の中で客観的な視点を持ち、自分を変革するために外国語はあると感じています。

最後に、文化構想学部の素晴らしさは何でしょうか？

■先生
多くの人が「これは良いものだ」と根拠なく思っていることに対して、「本当にそうなの？」と距離をとる姿勢が持てる。何に対しても「“そうだよね”と言わなくてもいい」という姿勢がとれる場所かと思います。

■卒業生

たとえば“文学×心理学”といったように、異なる分野の学びをかけ合わせて研究できるのが文化構想学部の特長です。私自身、高校生の頃に文学と心理学に興味があったので、どちらも学べる文化構想学部に興味を持ちました。学びの幅が広くて、新しい。文系志望の人にとっては、とても魅力的な学部ですね。

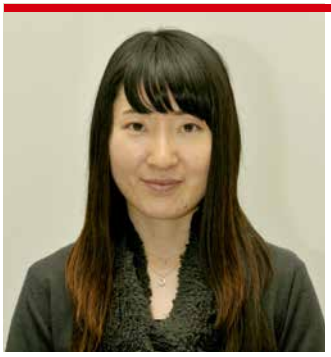
●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

小沼純一先生

早稲田大学文学学術院 教授

私立暁星高等学校出身。学習院大学文学部フランス文学科卒業。製薬会社に勤務しながら、文学、美術、音楽についての文章を多数発表。流通経済大学・国立音楽院等での勤務・講演、早稲田大学文学部客員教授、助教授を経て、現職。

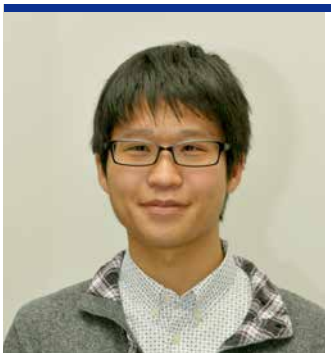


■卒業生

滝口美紗紀さん

株式会社ケーズオフィス ライター職（2015 年度取材当時）

私立淑徳与野高等学校出身。早稲田大学文化構想学部文芸・ジャーナリズム論系卒業。卒業後に勤務した医療機器メーカーから転職し、現在は web メディアのライターとして活躍。クライアントの要望に応えながら、様々なジャンルの記事に挑戦している。



■大学生

二宮朋輝さん

早稲田大学文化構想学部文芸・ジャーナリズム論系 3 年生 (2015 年度取材当時)

私立開智高等学校出身。高校時代の現代文の授業に感銘を受け、早稲田大学文化構想学部に入学。出版サークルの活動のかたわらプログラミング技術を身につけ、将来は IT 系の技術職を目指している。